

蒼空の会社員

kr36

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは東京上空、飛行機通学があたりまえな学校が密集する空域において学生は自分の学校の縄張りの為に争うことが日常化していた。

一方、学校が飛行機通学をやめると自分達が着陸させる飛行場が無くなる為に学校の縄張り争いに手を貸す大人たちがそこにいた。

学生は登校や青春の為に大人は出社の為に戦う小説です。

紫電改のマキの世界観における学生以外の一般人にたいしてスポットを向けてみたお話です。

オリ主視点を中心に原作ストーリーを進めて行きます。

目次

通学は飛行機で	1
通学は満員電車で	4
一般人の事情	7
詳しい話はまた今度	11
無知故に	14

通学は飛行機で

春半ば、この暖かい日差しに思わず閉じてしまいそうになる目を擦りながら、男は眼下に見下ろした東京の街並みのなかに飛んでいる深緑色の双発機「一式陸攻」をその視界に収めながら飛行していた。

一式陸攻の回りには銀色の機体に緑の迷彩を施してある単発戦闘機「飛燕」と日本の戦闘機のなかではおそらく一番有名な機体「零戦」が悠然と飛行している。

男は無線に向かって話し始めた。

『こちら栗原、お蛭ちゃんたち異常ありませんか？』

『通学機、異常ありません』

『みやび、異常ありません』

『お蛭、異常ありません、栗原さん周りの様子はどうですか？』

『少し待ってください』

栗原の乗っている単発爆撃機についている爆撃用の小窓からでは周りを確認するのに視界が足りないのです、エルロンを使い機体を上下逆さまにして東京の街をその視界いっぱい収めて周りの状況を確認する。

『こちら栗原、周りに定期便が二機、一時の方角離れたところに三機別方向に向かってるな……ん？八時の方角の二機……』

栗原は、双眼鏡を取り出し八時の方角の二機の様子を確認する。

『八時の方角の二機、そちらに向かってきてる、双発に胴が二つP38ライトニングだ、距離およそ五千』

栗原は機体を元に戻し方角を八時の方角に向けた

『こちらお蛭、いつもどおり監視して相手が撃って来たらお願いします。』

『栗原、了解』

二機のライトニングは高度をあげながら通学機の方角に向かってきている。

「奴ら初心者だな最短コースをとらずに真正面に通学機をとらえたまま向かってきている」

通学機の上空を飛んでいた栗原機が方向をかえてそちらに向かっているにも関わらず。

警戒をして遠回りのコースをとらない所を見るにこちらに気づいていないか、余程の実力者かなのだが、エネルギーロスがあるのにも関わらず方向舵を使って微調整をしながら上昇しているのだ。空戦エネルギーの事を考えていない初心者だろう。

『こちら栗原、奴さん達はこちらに向かっている模様』

『お虫、了解、通学機は学校まで後少しの所だけどいったん上昇してください、みやびは通学機の上をとって上昇、私はいったん離れて相手の後ろをとります』

『みやび、了解』

『通学機、了解』

通信を受けて通学機と零戦は上昇を開始、飛燕は左に旋回しながら上昇し始めた。

三分後

爆撃用の窓からみえるライトニングの影が小さくなっていく

『こちら栗原、まだ距離二千の所だがライトニングが降下を開始、奴ら上をとったのにわざわざ通学機を後ろから襲う気のようにだ』

『お虫、了解、こちらは降下し線路の影から行く、栗原さんはいつもどおり上からお願ひします』

『栗原、了解』

飛燕は降下を開始、高度を速度に変換しながら相手のしたにある線路まで降下すると線路に沿うようにして飛んでいる。

『こちら石神通学機、接近中のライトニング、そちらの意図を教えてください』

『……』

ライトニングの片割れが無言のまま一気に高度を落とし距離を詰めて発砲を開始する。

それに対して通学機は銃座からの射撃を開始する。

『ライトニングからの攻撃を確認』

『了解、戦闘開始』

お蛸ちゃんからの戦闘開始の合図を受けて栗原は敵に向けての急降下を開始、零戦は急旋回して敵機の後ろに回り込む。

降下しなかったもうライトニングがさせまいと零戦に標準を合わせようとしたところで高架線路の影から高度を一気上昇した飛燕にどてっ腹を食いつかれて落とされていく。

これに気付いたライトニングが高度を落としながら旋回し戦線離脱を図った所で真上から不気味なサイレンの音が鳴り響き次の瞬間には翼を折られ墜落していった。

通学は満員電車で

『急行池袋行き発車いたします、お近くの空いているドアからご乗車下さい』

朝八時、都会の駅では当たり前の人混みの中で二人の高校生が走っていた。

「マキちゃん、その電車乗って!」

「うわっ人いっぱい、おまつり!?!」

『間もなくドアが閉まります駆け込み乗車はご遠慮下さい』

「乗れる乗れるホラ!」

黒髪の高校生はもう一人のマキという名前の茶髪の高校生を無理やり背中で押し混みながら満員電車に乗り込んだ。

十数分後

何駅か通りすぎ人も少なくなつて余裕ができたのでマキは車内のつかまり棒に体を預けている。

「マキちゃん満員電車慣れた?」

「……きつーいよだきつらーい、話には聞いてたけどこれほどきついとは思わなかったよ」

「……まあ、満員電車を回避する方法も無くはないんだけどね……」

と言いながら黒髪の高校生は窓の外を指差すその先には飛行機がとんでいた。

「ああ……あれで通学できればどんなに楽か」

「無理だよ……こんな都会じゃあ「それがムリじゃあ無いんだよね」瞬間、耳をつんざくエンジンと共に電車の横に戦闘機が降下してきた、窓からみえるその飛行機の操縦者は彼女たちと同じ制服で長い銀髪をした少女が乗っていた。

「女の子が乗ってた! 私たちと同じ制服髪の長い」

「え?じゃあ二年の《飛燕のお螢》さんね!」

電車の横を飛んでいた飛燕は右旋回しながら急上昇してライトニングを叩きおとしていた。

「街の上で空中戦してる!?!」

マキは思わず窓に張り付いて空中戦を眺め始めた。

電車の中からはちらほらと「若者は元気でよろしい！」等の声が聞こえ街の上での空中戦は当たり前前の事として受け入れていた。

「モコちゃん、これ都会では普通なの!？」

「普通普通、マキちゃんの地元ではなかったの?」

「そうそう無いよ、やっても曲芸飛行だし地元での通学機赤トンボだったから」

見ていると一式陸攻の後ろを飛んでいたライトニングが右旋回降下しながら離脱を開始している。

その後ろをついていた零戦は追従せずに陸攻についていくようだ。

「あくあれは不利になったから逃げたね」

「だねえ、簡単に離脱できるかはわからないけど」

「え?モコどういう事」

「あの一式陸攻、私たちの学校の通学機なんだけど、いまみえてる二機の学生機以外に護衛がいるの、たぶんそろそろ」

突然小さくサイレンの音が聞こえた。

マキは上空で空中戦が起こっていたので住民の避難の為にサイレンを鳴らしているのかと思ったが、そのサイレンの音がどんどん大きくなるにつれて思ったものと違う事を理解した。低く飛んでいるライトニングに鉄の雨が降り注いだ。ライトニングの翼が折れ数秒後、エアブレーキを開いたガルウィング翼の急降下爆撃機「スツーカー」がライトニングの真後ろを通るように急降下していった。

「え?」

「今のが、《狙撃の栗原》」またの名を距離千五百で当ててくる《変態栗原》や」

「え?」

「誰?って遠坂さん」

振りかえるとそこには少し日に焼けたスーツ姿のおじさんがいた。

「おっす、モコちゃん教えた店にちゃんと照準機はあったか?」

「あ、ありましたよ、教えていただきありがとうございます」

「ちよ、ちよつとまってモコ、この人誰?それと照準機つてなに?」

「あー始めまして俺はさっきのスツーカーに乗ってるやつと同僚の遠坂寛人いますよろしくお願いします」

「あ、私は羽衣 マキっていいいます。」

「照準機については後でのお楽しみ、それよりも遠坂さん噂には聞いていましたが本当に千以上離れている所から当てるんですねえ」

「相手が回避機動をとっていないのを前提としてるとはいえ場合によっては二千からでも当てられると本人は豪語してるんやで？」

「それが本当だとしたらとんでもない話ですねえ、しかもそれをガンポット積んだ急降下爆撃機でやるんですから」

「だよなあ……、せやあいつ後部銃座を改造して……」

マキは急に始まった機体の考察についていけず目的の駅まで静かに話を聞いているしかなかった。

一般人の事情

顔をぶくつと膨らませながら大股で歩いて行く女子高生をスーツのおっさんと女子高生が追いかけてながら謝っている奇妙な光景が展開されていた。

「マキちゃんごめん」

「無視して二人で盛り上がったてすまんかった」

マキは顔を膨らませながら二人の方に振り向いて中断された話の続きを促した。

「で、結局遠坂さんってどんな人なの？」

「さつきいったとおり栗原の同僚兼学校の社会人整備支援者やで」

「整備支援？」

「あ、マキちゃん知らへんのか、学校の通学に飛行機使ってええところほだいたいこの所は一般人に滑走路の提供もしとるんやで」

「そうなの？」

「なんでしらんのや……」

「だって地元は公共の飛行場多かったし、学校の飛行場は学生機専用だったから」

「ええなあ、こっちは公共のはあっても一つ一つが離れ過ぎとるし、そもそも土地が足りひん、やから飛行場付きの店はたくさんの店舗が出資して土地買とるくらいやで」

「で、なんで整備支援者？をやってるの？」

「さつきいうたとおり飛行機通学o.kな学校は許可を出した会社や一般人何かに飛行場を提供しとるんや」

「うん」

「で、さつきの空戦見たようにここら辺では学校同士の空域を争うとる状態だな」

「うん？」

「学生の間での話とは言え飛行場を提供してくれとる学校が空域を手放すと生徒が飛行機登校をやめざる終えなくなつて滑走路事態が取

り潰しの危機に陥るんや」

「はい？」

「要点だけ出してまとめよか、それでも長いけどついてきてな？」

昔の国の政策でだいたいの学校が飛行場を持つてる↓

当時の不良達が縄張りとして空域を設定しだす↓

もちろん不良同士の小競り合いになる↓

空域が無くなると飛行機通学がへる↓

1980年代以降に出てきた飛行機反対派の人たちが一定以下の稼働数の学校は飛行場の取り潰しをするよう法案の改正に成功する↓

もちろん一般生徒も飛行機通学したいので空域維持や拡大に勝手に手を貸しだす↓

今まで一般生徒には脅す程度だった不良達も一般生徒も攻撃対象に含めるようになる↓

ここらへんの学校の生徒の中だけでの伝統になる。

以上や」

怒涛のラッシュによりマキの目に涙が浮かんでる。

「うう、歴史の授業みたい、頭いたい」

「法案関連の所は近代史にでるで？」

「むしろ歴史の授業だった!？」

「まあ、つまりいうとやな滑走路無くなると困るから手を貸してる社会人ボランティアの整備士が俺で通学機の護衛が栗原や他にもおるけどな」

「あ、他にもいるんだ」

「護衛ボランティアは殆どおらんけどな、ここの学校のボランティアは殆ど整備専門や」

「へー、で、栗原さんって？」

「電車のなかでもゆうたとおり、やつは狙撃の栗原って呼ばれてて遠距離から相手に被弾させるのが上手い飛行機乗りなんや」

「でも、千五百から当ててもそうそう落とせないんじゃないの？」

「そうや、でもあいつの乗る機体はガンポットを装備してて元々ついでる七ミリ機銃と合わせて計六門の機関銃と機関砲を乗っけとるんや、それだけに当てりゃあ相手もどこかしら破損するって寸法や」

「うわ、えぐ」

「いや、これでもあいつの元々の愛機の事を考えるとまだ優しい方やけど」

「元々の愛機？」

「あいつ、ここに転勤してきたとき元々乗った愛機叩き落とされとんねん、今修復中らしいけどな」

「二機持ちかあ大人っていいなあ」

「いや、あいつ四機もちや、給料吹っ飛んどるらしいけどな、独身貴族様々言うとったわ」

「四機?!駐機代だけでも大変そう」

「マキちゃん、田舎と違ってこっちの飛行場は立体化されてて少し安めに設定されてるんだよ、それでも土地喰い虫だから飛行機反対派の批判材料の一つにされるんだけど」

「せやで、おじさんはボランティアで整備しとるけどこっちじゃあ公共駐機場と契約した整備士がおるくらいなんや」

「そうなんだ」

「マキちゃん、立体駐機場は学割が効くんだよ」

「え?!そうなの!？」

「せやから学生の頃は飛行機のみで大人になったら乗らんようになったいうやつもようけおるで」

三人で歩きながら喋っていると通学機を含む学生機三機が着陸準備に入っていた。

「丁度降りてきとるな、まずは通学機、次に学生護衛機最後にあいつの順でおりに来るんや」

マキ周囲を見わたしてもスツーカーらしき影も見えない。

「でも栗原さんまだ来てないみたいですよ？」

「真上みてみ？」

「ん、あついた!」

「およそ三千メートル、空中警戒の為にあいつは学生機全員着陸するまでその高度で待機しとる」

「じゃあ着陸するまで時間がかかりそうだね」

「いや、全員着陸したらあいつは五分かけずにすぐ着陸すんで？」

「え、でも三千メートルつて減速に時間かかるよね？」

見とき、そんな言葉と共に滑走路を見てると零戦と飛燕が滑走路におりて来ていた。

すぐに滑走路で待機していた学生達がきて滑走路を開けるように機体を押していった。

来るで、こいつ使いと言って遠坂さんは小さな双眼鏡を手渡してきた。

「あ、ありがとうございます」

それを受け取ってすぐに覗き込むと、そこにはエアブレーキを開いて学校から離れるように急降下していくスツーカーがそこにいた。

「えっ」

「あいつが変態と呼ばれる理由その二やな、どちらかと言えば登校時間の風物詩やけど」

「毎回毎回あんな無茶な降り方してるんですか？」

「せや、あいつ普通に降りてると会社間に合わんからってあんな降り方しとるんや」

「エアブレーキ使っても減速間に合わないと思うけど」

「あいつ水平飛行に入ったらフラップとエアブレーキ同時使用してまで無理やり減速して着陸してくるんやで」

アホやろ？そう遠坂さんは呟く、確かにアホらしい降り方だ。いつ事故に繋がるかわからない。

「あいつ時々ハードランディングになつても無理やり降りてくるからなあ、整備するこつちの身にもなつてもらいたいわ」

遠坂さんは頭を抱えながら首を横に振っていた。

詳しい話はまた今度

滑走路に向かいスツーカーが着陸体制に入ってるのをマキ達は見学していた。

「うわあ、いつみても詰め込みすぎだよねえ、あれ」

「モコ、何が詰め込み過ぎなの？」

「スツーカーのエアブレーキって急降下時に速度が出過ぎないようにするためのもの何だけど、ガンポット積んでる機体は急降下を想定してないし干渉するからはずすのが普通何だよ」

「つまり？」

「積まなくてもいいものを改造してまで積んでるってこと」

確かにエアブレーキはガンポットのやや後ろに干渉しないように設置されている。

遠坂さんが更に情報が付け加えてくる。

「せやな、しかもあの機体奴の趣味でエンジンも載せ変えてるせいで鼻の長さが延びとるんやで」

「へえ〜」

「なんや、しまりの無い返事やな」

「だって分からないし」

「おじさん悲しなってきたわ」

そうこうしているうちにスツーカーが滑走路に接地する、ドンと鈍い音が鳴ると共に途端に砂煙が当たりに広がる。

「うわ、あいつまたハードランディングしよってからの……」

「機体は壊れないのかな？」

「スツーカーはガルウイング翼っていう翼に固定脚の頑丈な脚回りで多少派手に着陸しても大丈夫な様にはなってるんだよ」

「成る程」

「せやけど整備側からするとあかんって言いたくなる着陸やな、ハンマー使って音とかで検査しなあかんし」

長い滑走ののち停止したスツーカーのフラップとエアブレーキがたたまれ、中からごちゃごちゃと細かい機械がくつついているヘルメツ

トを着けた男がキャノピーを開いて伸びをしている。

「なに？あれ」

「奴がいろんなもんを改造して作ったヘルメットや、詳しい説明はまた今度にさせてや」

遠坂さんは歩いて近づいて行ってヘルメットをとった栗原さんの頭をはたいて叱っているみたいだ。

その間に予鈴が鳴り出した。

「マキちゃん、そろそろ行かないと」

詳しい話を聞く暇も無く、マキ達は教室へとかけていくのであった。

side切り替え

スパーン！と栗原の頭から小気味良い音になる。

「じぶんアホか?!いや、アホなんやな!」

「いや、すみませんって遠坂さん、次は強制着陸とか決行しませんから」

「じぶんそれいっの何度めじゃ!ボケ!」

栗原が遠坂にしかられているところにごお虫近づいてきた。

「栗原さん本日もありがとうございます。」

あと遠坂さんの言い分は当然ですが、予鈴も鳴ってしまいましたしお二人とも会社に向かわないと間に合いませんよ?」

栗原と遠坂は腕時計を確認すると慌てて牽引車に飛び乗り機体を護衛機専用のシエルター格納庫の方に引っ張っていく。

「くっそ、学校近くで襲われなけりゃあまだ余裕があるんだけどなあ!」

「そりゃあこっちの話や!慌てとるからって毎度毎度……機体整備しとるこっちのこと考えい!」

「着陸前に機銃撃つて減速しても良いならもうちよつとソフトな着陸になりますよ!」

「危ないわ！」
そんな二人をお螢は苦笑いで見送り校舎に走っていった。

無知故に

「かくぼすかくぼす空飛ぶウサギ」

「モコ、こんなところに連れてきて何の用？」

放課後コンクリート製のでっかい蒲鉾のような建物の前にマキは連れてこられていた。

モコはニヤリと笑うと、

マキちゃんが一番欲しいもの♥？

と言いながら建物の大きな鉄の扉を押し開いていく。

建物の内部に光が差し込み中にある大きな金属の塊が光の下に晒される。

「私たちのヒコーキ」

マキは口をあんぐりと開けて固まったその顔の前でモコは「おーいマキちゃん」とおどけたような感じで手を振っている。

「どーしたのコレ!？」

「拾った」

笑顔でピースをしながらマコが返す。

「入学式の日にここで見つけてさー、今までコツコツ直してたの」

「それでモコ部活入ってないのに帰りが遅かったんだ」

「そう、ここら辺のパーツ屋、ジャンク屋を遠坂さんに教えてもらった
り手伝ってもらったりしながらね」

「だから、あんなに仲よさげだったのか」

「そうだよ、そしてそのお陰で憧れのヒコーキ通学ライフが手にはいるのだ〜!」

「……」

あまりの事にあきれたのかかけることばも見つからないのか目を点にしながらかマキは押し黙る。

「マキちゃんテンションひくいぞー、最後の仕上げもあるんだから」

と言いながら、モコはカバンから抱える程の大きさの機械を取り出した。

「何？それ？」

「照準器……ヒコーキの眼よ」

モコは手慣れたようにヒコーキのステップを使い翼に上がるとコックピットの中に手を入れ照準器の取り付けを始めた。それを見てマキも翼の上にぎこちないながらも上っていく。

「見つけた時この部品だけなくてさ」

「前の持ち主がはずしてたんじゃない？」

「うん、その可能性もあるかーつと、よし、取り付け完了……あとは試験飛行だけど……マキちゃんお願いね♥？」

「なしか!？」

「免許とるの忘れてた」

「おうちやきいなあ^{横着者}」

「でも……飛びたいんでしよう？」

マキは体をビクツと震わせた何の事はない、自分の本心を当てられたからだ。

「も、もうしょうがないなあ〜でもコレどうやって格納庫から出すの？」

「あ〜……」

「もしかして考えてない？」

モコは頬を掻きながらうなずいた。

side お蛭

ドンつと苛立ち混じりにお蛭が乱暴に扉をしめる。

「話にならん！」

「やはりダメでしたか」

「このままでは護衛の戦闘機が足りないのに生徒会の腰抜けどもめ」

歩き出すお蛭について行こうとみやびが動きだした時にふと外を見てみると何人かの生徒が機体を押しして滑走路へと移動させているのが見えた。

「石神のエンブレムと尾翼に電光マークの紫電改？……どういうこと？」

みやびはこの学校で自分達の他に戦闘機に乗っている人は知って

いるものの紫電改に乗っているのは見たことが無いし、石神新撰組の電光マークは護衛ボランティアをやっている人たちの機体にしか描いていない、石神のエンブレム(白ラインの赤丸にイと書かれたもの)を入れて良いのは学生や先生のみで一般人の機体にはそれこそボランティアの人たちの機体では石神のエンブレムは使えないのだ。

みやびが思わず足を止めたのをみてお蛸はみやびを呼ぶ。

「みやび?..いくわよ」

瞬間、紫電改のエンジンがかかりその唸り声は回りに響きわたる。

「この……エンジン音は……」

お蛸は聞き覚えのあるエンジン音に顔をしかめて走りだしエンジン音の元凶の元に向かうために階段を駆け降りる。

「あつお姉さま!」

みやびは呆気にとられてしまい立ちすくんでしまった。

聞こえるエンジン音が唸るような音から吠えるような爆音を叩き出し始めた時にやつと建物の外にお蛸は飛び出した。

「その紫電改とまれ!」

叫びも虚しく紫電改は目の前で飛び立ち高度をあげていく。

「なんて事!」

お蛸は息もつかぬまま紫電改の飛び去った方向を確認する。

「あの方向は……吉祥寺方面!」

確認が終ると共に滑走路脇防空格納庫に走りながらスマホを取り出しどこかへ連絡をかける、幸いすぐに携帯は繋がった。

「もしもし!?栗原さん!」

「うん?お蛸ちゃんかどうした緊急か?」

「そうです、今どちらにいますか!」

「社用機で高編平上空、石神方面に飛行中」

「吉祥寺方面に向かっていただけませんか!」

「いいけど、何事か説明して」

「今石神から紫電改が飛び立ち吉祥寺方面に向かっています、多分生徒がここら辺の墜落機をレストアしたものなのか石神新撰組のマー

クが入ったものです」

「なんだと!? そりゃあへたすりゃあ……」

「そうです、最悪の場合こちらから喧嘩を売りに来たと思われる可能性があります」

「つまり、そいつらが吉祥寺のやつらに補足される前に見つけて帰還させなきゃいかんのか……わかった吉祥寺に向かう」

「こちらもスクランブルして追いかけます荒事になった場合は栗原さんは社用機ですから無理はしないで下さい」

「了解!」

電話を切ると素早く飛燕に乗り込みエンジンをかけてすぐにスロットルを開き防空格納庫から自走して滑走路へと機体を移動させているときにやつとみやびが追い付いてきた。

「お姉さま!」

「みやびはスクランブル準備、管制塔と連絡をとってレーダーに注意するように伝えて、緊急事態にそなえなさい」

「わかりました」

みやびが走り去り。

お蛸は方向舵をきって滑走路に沿うように走り出した所でスロットルをいつもの離陸で使う出力より更に大きく開いて半トルクで進行方向を変えようとする機体を方向舵で無理やりおさえ、飛燕を空へと飛び立たせた。